

きのこ 1万 Bq/Kg、川魚 1.3万 Bq/Kg

——— 今も続く放射能汚染 ———

福島原発事故からもうじき 10 年目を迎える。政府やマスコミは、「福島は終わった」かのように世論を誘導し、宮城県知事は、福島事故以来停止していた女川原発の再稼働を認め、福井県では、老朽原発再稼働に向けて行政が動き出した。高レベル廃棄物を受け入れれば町は栄えるとする行政も現れた。こうした動きは、何れも福島原発事故の風化の表れである。だが、放射能汚染は今も厳然と続いている。「放射能測定センター・南相馬（通称：とどけ鳥）」のデータを紹介し、福島の今とこれからを考えたい。放射能を無視すれば、そのつけは必ずやってくる。

キノコや山菜の汚染・最新情報

事故直後の野菜や果物・コメなどの汚染は、誰でも記憶に残っているだろう。しかし、野菜やコメなどの汚染が次第に低下し、9 年経った現在は殆どが検出限界以下となり、食べる事に大きな支障はなくなった。

原因は、土壤中の放射性セシウムは年がたつにつれて土壤に固着し、水に溶けなくなったからだ。ところが、キノコや山菜は依然として強烈な汚染が続いている。

とどけ鳥がこの 10 月に測定したキノコの検体数は 58 検体、その多くが驚くべき高濃度の汚染である。

マツタケ：最高 13,858 Bq/Kg、平均 5,710 Bq/Kg (6 検体)、地元住民が最も好きな**イノハナタケ**：最高 71,534 Bq/Kg、平均 7,634 Bq/Kg (35 検体)である。山菜は 2019 年 4 月のデータだが、**ゼンマイ**：最高 10,097 Bq/Kg、平均 6,967 Bq/Kg (2 検体)、**フキノトウ**：最高 8,054 Bq/Kg、平均 1,240 Bq/Kg (8 検体)、**ワラビ**は最高 683 Bq/Kg、平均 238 Bq/Kg (5 検体)である。

キノコや山菜が、セシウムで高濃度に汚染する原因の一つは、土壤中の慢性的なカリウム不足である。カリウムは水に溶けやすく、山野の表層土壤には極めて低濃度だが、セシウムは土壤表面(～20cm)にある。その結果、キノコや山菜は、化学的性質がカリウムに似たセシウムを大量に吸収する。こうした汚染傾向は数十年続くだろう。セシウム¹³⁷の半減期 30 年を経て、やっと半分になる。除染が行われない森や山野の生物の汚染は、今後も続くことを忘れてはならない。

川魚は今も高濃度汚染

南相馬市小高区の住民 S さんは、自宅にシンチレーション測定器を備え、様々な物体の放射性セシウム汚染を現在も測定している。そのデータを一部紹介したい。今年 7 月に彼が小高区に隣接する浪江町のダム支流で採取した、川魚の測定結果である。それによると、**イワナ**は最高 13,683 Bq/Kg、平均 8,652 Bq/Kg (5 検体)、**ヤマメ**は 1 検体 10,444 Bq/Kg という高濃度である。

川魚は、汚染した山からの餌や苔を食べるため、こうした高濃度汚染になる。この傾向も今後長く続くだろう。こうした傾向は何れも、チェルノブイリでも起こった事である。

破壊される自然環境

私は毎月、南相馬に行くたびに、必ず川や山野を観察するが、この数年に起こっている大きな変化に心が痛む。事故直後は、放射能汚染がひどかったにも拘わらず、河川や溝にはたくさんの魚や蟹・昆虫がうごめいていた。人間が居なくなった結果、自然は彼らの天下になったからだ。しかし年月が経つにつれて、河川から魚や昆虫が次第に姿を消し、今ではどこの川も季節に拘わらず、殆どその姿を見かけなくなった。魚や昆虫が繁殖能力を失い、生存できなくなったと考えざるを得ない。元気なのは植物だけだ。放射能は遺伝子を破壊し繁殖能力を奪うが、生物には壊れた遺伝子を修復する酵素がある。その結果我々は生きていられる。この酵素が動物には 1 種類だが、植物は 2 種類持つので繁殖を維持出来ているのだ。

(2020 年 11 月 26 日 河田)